【連載】
日中学術交流の現場から 第十八回

市民にとって社会風刺の笑いとは何か

北京でみたぜんじろうの笑いと

自民党や維新と癒着する吉本興業の笑いの差異

山口直樹

(北京日本人学術交流会責任者)

はじめに

2017 年 6 月 20 日、夕方、6 時半、北京で吉本興業のお笑い芸人、ぜんじろうのライブが、日本大使館近くの亮馬橋の好運街のバーで開催された。

ぜんじろうとは、どのようなお笑い芸人だろうか。私もあまりなじみはなかったのだが、かなり貴重な機会であることはたしかだったので、聞きに行ってみた。

観客は、15,6 人ほどだっただろうか。それほど多いわけではないが、日本人の 20 代から 50 代の人々が聞きに来ていた。日本のマスメディアの人は、いなかった。中国で相声(中国語で漫才という意味)を学んでいる日本人や日本語教師をやりながら中国でお笑いのライブをやっている日本人女性も来ていた。

中国人で聞きに来ている人も 2,3 人いた。

ぜんじろうにとっては、はじめての中国でライブであったようだ。おそらく海外のニュースとして新聞やテレビで報じられることはないだろう。いや、しかし、だからこそここに書いておくことにしたい。そこで見たことはかなり貴重で考えさせられることが多かった。

ぜんじろうとの写真(2017 年北京にて)

1．ぜんじろうというお笑い芸人

読者でぜんじろうというお笑い芸人を知っている人はどれぐらいいるだろうか。

30 年近いキャリアを持っているお笑い芸人でかつては、かなり大阪ローカル―たとえば『テレビのツボ』などに出ていた―その後、『たけしの元気がでるテレビ』など全国ネットのテレビにもでていたのだが、東京のテレビに求められているものと自分が表現したい笑いとがあわないらしく次第にテレビから離れていくことになった。

だから、日本ではネット上などでは「ぜんじろうは消えた」と言われているという。しかし、テレビにでていないからといって活動を休止しているわけではない。テレビにでていないと「消えた」というのは、悪しきテレビ至上主義あるいはテレビ中心主義に陥っているといわざるをえないのだ。テレビで表現できないことというのはたくさんある。北京で行われたぜんじろうのライブはまさにテレビで表現できないことに重点を置いてなされていた。

私もライブを聞きに行ってはじめて気が付いたが、2000 年頃からぜんじろうは、日本を離れ、アメリカのニューヨークなどでお笑いのライブをやっていたらしい。

そして、その後、世界中をまわってお笑いのライブをやっているのだという。今回もインド、スリランカ、上海、無錫とまわって北京に来ていたのだ。

私は、それを聞いたとき「やはりテレビをただ漫然と見ているだけでは、真実はわからない。自分の足を使って自分の目で見なくてはわからないことも多い。」つくづくそう感じたものだ。

2.「何書いているんですか？吉本のスパイですか」

ぜんじろうのライブは、前半と後半にわかれていた。まず前半は、48 あるネタのうちから自由に観客に選ばせてそれについて語っていくというものであった。これはスタンダップ・コメディといわれるものである。マイク一本で様々なテーマについて語るという芸である。たとえば、どんなテーマのネタがあっただろうか。その一例を見てみると以下のようなものになる。

「自民党とマリファナ」「スマップ解散とタブー」「橋下市長とノック知事の違い」「英語の教科書と罠」「上岡龍太郎は変態」「ハリウッド版ドラえもん」「ジャニーズ解散の謎」「テレビ局の自粛の恐怖」「日本のユーモアとアメリカのユーモア」などなどである。

他にもいろいろあるのだが、ここにあげたテーマを見れば、ぜんじろうというお笑い芸人が、生々しい政治を回避せず、挑戦する姿勢をもったお笑い芸人であることがうかがえる。

「自民党とマリファナ」というテーマは、実は自民党が、マリファナの解禁を考えているのではないかということを具体的な例をあげながら述べるものであった。実は、世界的にみればマリファナは、解禁されているところがけっこうある。アメリカなどにおいては、州によって法律が違い、マリファナが合法化されているところもある。日本では安倍晋三の妻、安倍昭恵が大麻の栽培を鳥取県でやっているということについても述べていた。

私は、これに関しては知っていたが、在北京の日本人は知らない人も結構いた。普通のマスメディアは、こういうことは報じないからである。ぜんじろうが、自民党のマリファナに関するダブルスタンダードにお笑いで鋭く切り込もうとしていたのには、好感が持てた。私は、「なかなかやるな」と感じたのである。

それで私は、ライブを聞きながら、思いついたことをノートにメモしていたのだが、その姿が、ぜんじろうの目にとまったらしく「何書いているんですか？ 吉本のスパイですか」といわれてしまった。これが、私とぜんじろうとの初対面の会話となったのである。

3. 吉本興業におけるダウンタウンとぜんじろう

それにしても初対面の会話が、「吉本のスパイですか」とは、尋常ではない。

これはどういうことなのか。ぜんじろうは、吉本興業に所属するお笑い芸人のはずである。なぜ吉本興業が、ぜんじろうをスパイしにくるのか。

それは、後半の「吉本かたき討ち」というこれまたテレビでは放送不可能の漫談あるいは人情噺を聞いてみてぜんじろうがそういった理由が、わかってきた。

たしかにぜんじろうは、吉本興業所属のお笑い芸人ではある。しかし、吉本興業に所属するお笑い芸人が、みんな吉本興業とうまくいっているとは限らない。

このことをぜんじろうは、「吉本興業でダウンタウンを漢民族とするなら私は、ウイグル族です」と表現した。なるほど北京のライブならではの絶妙の比喩である。

そういえば、吉本興業に所属するお笑い芸人であるならもっと吉本興業の支援があってもよさそうなものだが、どうもぜんじろうはそういうものはほとんど受けていないようだった。

海外でライブの活動をやっているらしいが、吉本興業が、それにお金を出して支援したことは一度もないらしい。

これに関して「あの人たちとはうまくやっていけないんです」ともぜんじろうは言った。どうもぜんじろうは、吉本興業という会社とはうまくいってないようなのだ。

これには、これまでのぜんじろうと吉本興業との関係の経緯を理解する必要がある。ぜんじろうが吉本興業にはいるのは、ダウンタウンよりも少しあとぐらいである。

ダウンタウンが売れないころマネージャーをやっていたのは、大崎洋という人物であった。後に吉本興業の社長そして会長にまで上りつめた人物である。

ぜんじろうは、吉本興業にはいったころから大崎洋からは、受けがよくなかったらしい。

当時、吉本興業の会長だった林正之助(創業者、吉本せいの弟)に大崎洋が「こいつまた裏切りますよ」といったというはなしが、ライブでは語られていた。

大崎洋が、そうした発言を行ったのは、ぜんじろうが、漫才コンクールで優勝したときのことだったようだ。ぜんじろうが結成したコンビは、この漫才コンクールで林正之助会長に「エンタツ・アチャコの再来だ」と言わせたたらしい。

エンタツ・アチャコとは、戦前の吉本興業で売れっ子だった漫才師、横山エンタツ、花菱アチャコのコンビのことで、ぜんじろうはこの漫才師を研究して自分たちの漫才に取り入れていたのだという。ひとつは歴史的に見て現在の漫才のスタイルを確立したのは、エンタツ・アチャコであったからである。もう一つの理由は、当時、若手漫才師としてダウンタウンが評判になっており、関西の若手漫才師はみんなダウンタウンの真似をした亜流のようなものばかりだったため、ぜんじろうは、そうした状況のなかであえて逆をいくことを選んだからであった。

このぜんじろうの戦略は、功をそうした。吉本興業のトップだった会長の林正之助が、「エンタツ・アチャコの再来だ」と絶賛し、自分の部屋にまでぜんじろうを呼んだりしていたというのだ。ちなみに吉本興業は、1931 年の満州事変のあとエンタツ・アチャコを「満州国」に派遣し、日本兵の慰問を行っていた。また日中戦争直後の 1938 年に吉本興業と朝日新聞が、共同で「わらわし隊」というものを結成し、より大規模で組織的な中国の日本兵への慰問を行うようになっていた。この「わらわし隊」には、林正之助会長もかかわっていたようである。だからエンタツ・アチャコへの思い入れが深かったのかもしれないが、ぜんじろうは林会長の推しもあって漫才コンクールで優勝する。そのときのライバルは、ダウンタウンの弟分で大崎洋がマネージャーをしていたコンビだったという。

また、大阪のテレビで人気が出たぜんじろうは、東京に進出し、『たけしの元気が出るテレビ』に出演する。日曜の夜 8 時から放映されていた番組だが、その裏番組は、『ダウンタウンのごっつええかんじ』という番組であった。おなじ吉本興業のお笑い芸人が、同じ時間帯の番組に出演してい

るということで当時は話題になっていた。

こういう点からいってぜんじろうは、ダウンタウンとは、因縁浅からぬお笑い芸人といってよいだろう。それから 20 年以上経つが、大崎洋は、吉本興業の社長となり、ダウンタウンは、お笑いの世界で「天下をとった」とされている。今もダウンタウンを日本のテレビで見ない日はない。一方ぜんじろうは、日本を離れアメリカで武者修行した後、海外でライブを行ったり、ネットでお笑い動画を配信することに力を入れたりしている。現在テレビにはほとんど出演は、ない。単純に考えれば、ダウンタウンが漢民族で勝者、ぜんじろうがウイグル族で敗者、ということになるのだろう。しかし、そう簡単にはいいきれないものがあると私は考えている。

4. ダウンタウン松本人志と安倍政権

私は、ダウンタウンが、テレビに登場した初期から見てきた人間である。フリートークやシュールな漫才のネタは、嫌いではなかった。ところがここにきて私は、松本人志のワイドショーの発言などに首をかしげることが多くなってきた。

たとえば、松本人志は、安保法制に関して反対運動が起こると「対案を出さないのは無責任だ」といったり、共謀罪に関して「多少、冤罪があってもやむを得ない」とも発言したりするようになっている。漫画家の小林よしのりが、「松本人志は権力のポチ」と書くような状況が生じてしまっているのだ。これは一体どうしたことなのか。私は、松本人志が若いころ大阪のローカルの番組で「この考え方は戦争につながる考え方でやばい」という意味のことを言っていたことを記憶している。いまの松本人志にはそうした危機意識はみじんもない。金や名声を手にした人間が、現にある権力を肯定するという姿以外のものを見出すことができなくなっている。私は、いちはやく佐高信が、松本人志の母が、創価学会員であることに注目して批判していたことを先駆的な批判として思い起こした。

2017 年は、ネットに蔓延するデマが公共の電波を使ってテレビ放送された元年として記憶されることになるだろう。沖縄ヘイトの番組を年頭に放送した『ニュース女子』がそうだが、その前年、沖縄の米軍基地に反対して座り込んでいた作家、目取間俊に「土人、支那人」といったのは、大阪府警の警官であった。

この明らかな差別発言を行った大阪府警の警官を「ご苦労様」とねぎらったのが、大阪府知事の松井一郎である。森友学園の問題にも深くかかわるこの大阪府知事とダウンタウンは親しいという。大阪万博にダウンタウンがアンバサダーになっているのも、この関係であるらしい。松本人志は、橋下徹や安倍晋三を称賛する発言もしていた。「なるほどな」と思った。

5. 日本の笑いは幼稚で皮肉がない

ライブが終わったあと、食事をしながらぜんじろうと日本の笑いについて話した。ぜんじろうは、日本の笑いは、政治の問題などを扱わずとても幼稚だと言った。 これは、海外で武者修行やライブを

やってきた経験に裏付けられている。

そしてぜんじろうによれば笑いは、フロイト的な笑いとユング的な笑いに分けられるとし、以下のように言った。

「ダウンタウン以後の笑いは、幼稚化なんですが、僕流に言うと、心理学でいうフロイト（意識的）ではなく、ユング（無意識的）なんですよね。あのフロイトも弟子のユングを幼稚と言った。なんせ、ユングは、オカルト、宗教、非論理が大好きで、無意識を大肯定していました。一方、フロイトは、無意識を悪と捉え、意識をしっかり持ち、オカルト、宗教は、幼稚だとみなした。唯物論です。」

そして日本の笑いには、皮肉や風刺の笑いが欠けているとも言った。

いま日本のお笑い芸人は、バラエティやワイドショーでコメンテーターをやることが多い。その場合、たいていの場合は、世間の空気を読んで優等生的なコメントをする。それは、予定調和的であり、そこに皮肉なり風刺の笑いはない。権力への毒はないのである。日本のテレビで、そうした笑いの場所が、存在できなくなって久しい。こうしたなか「森友学園や加計学園など政治の問題を笑いにできない日本の笑いは、終わっている」とツイッターで発言し、松本人志の番組で謝罪させられたのが、脳科学者の茂木健一郎である。これを「テレビによる公開処刑」だとして松本人志批判をしたのが、オリエンタルラジの中田敦彦で吉本興業の上層部から「松本に謝れ」といわれたが、拒否しているのだという。もっとも、ぜんじろうによれば、オリエンタルラジオの中田にツイッターでよびかけても返事はないといっていたから、どこまで本気なのかはわからない。ともかく、テレビには出演できないといってもぜんじろうは、かなり志の高い思想あるお笑い芸人である。こうした人を埋もれさせてはならないだろう。

ぜんじろうの「吉本かたき討ち」の最後には、ぜんじろうが、吉本興業の社長である大崎洋やそのまわりの社員たちから嘲笑される場面がある。

絶望的な気持ちになったぜんじろうが、新宿の街を歩いていた時、出くわしたのは、明石家さんまだった。大崎洋やそのまわりの社員たちから嘲笑されたことを訴えるぜんじろうに明石家さんまは、「しゃれや、しゃれ」といって、さりげなくぜんじろうを励ますのだ。ぜんじろうは、どんな悲しいことも笑いに変えてしまう明石家さんまに感銘を受けたという。明石家さんまは、テレビでは決して言わないが、ラジオなどで「戦争に税金使うために税金を納めているんじゃない」とか「2020 年の東京オリンピック開催は、福島の人たちのことを考えると喜べない」と発言している。

これは非常にまっとうな感覚である。むしろ希望はこちらにある。

そして現在、ぜんじろうは、上岡龍太郎の唯一の弟子である。

そのことにふれるとぜんじろうは、上岡龍太郎に書いてもらったという紙を取り出 し、「長いものにはまかれるな」と読み上げてくれた。上岡龍太郎とぜんじろうの師弟は、フロイトとユングのような師弟ではないのである。Youtube などにはぜんじろうの動画があるのでぜひ見ていただき、TVの笑いと見くらべていただきたいと思う（※）。

※例えば、「The Daily Zenjiro Show」

https://www.youtube.com/@thezenjiro

上岡龍太郎

https://www.entax.news/post/202306021350.h

日本ではぜんじろうのやっているスタンダップコメディは、なかなか浸透せず、広がらないが―そういうところは日本の市民科学と似ているようにもおもえる―たとえば、アメリカでは民族、宗教、差別、ジェンダーといったものをテーマにしたスタンダップコメディが、非常に人気を集めている。

フォーブス誌発表、2016 年から 2017 年にかけて「世界で最も稼いだコメディアン」トップ 10 は以下の通りである。

1 位：ジェリー・サインフェルド（6900 万ドル（約 76 億 6600 万円）
2 位：クリス・ロック（5700 万ドル／約 63 億 2900 万円）
3 位：ルイス・C・K（5200 万ドル／約 57 億 7400 万円）
4 位：デイヴ・シャペル（4700 万ドル／約 52 億 1900 万円）
5 位：エイミー・シューマー（3750 万ドル／約 41 億 6400 万円）
6 位：ケヴィン・ハート（3250 万ドル／約 36 億 900 万円）
7 位：ジム・ガフィガン（3050 万ドル／約 33 億 8700 万円）
8 位：テリー・ファトル（1850 万ドル／約 20 億 5400 万円）
9 位：ジェフ・ダナム（1500 万ドル／約 16 億 6500 万円）
9 位：セバスチャン・マニスカルコ（1500 万ドル／約 16 億 6500 万円）

このなかでクリス・ロックが、アメリカの著名なスタンダップコメディアンであり、そのトップは 1 年で約 63 億 2900 万円も稼ぎだしているのだ。

テレビから排除されて細々と活動せざるを得ない日本のスタンダップコメディアンからすると考えられないような額である。

日本では、民族、宗教、差別、ジェンダーといったものを笑いのテーマにするようなお笑い芸人は、テレビからあらかじめ締め出されている―たとえば松元ヒロやぜんじろう―ため「知る人ぞ知る」といった存在にならざるをえない。

この違いは大きい。ぜんじろうは、この違いを「世間」の笑いと「社会」の笑いという風に分類して説明していた。日本には「世間」はあっても「社会」がなく「世間」の笑いを「社会」の笑いに開いていこうとする方向性が非常に希薄なのである。

6. 2023 年末、ダウンタウン松本人志の性加害問題が報じられる

2023 年は、ジャニーズや宝塚という芸能分野の内実が、一般の人々に知れ渡ることになった年であった。ジャニーズの強力な権力を私が感じたのは、『愛と死をみつめて』の中国語訳のコーディネートしていた 2006 年のことであった。制作された『愛と死をみつめて』のリメイクドラマの河野実役を草彅剛が演じていたのだが、異様なまでに肖像権に関して厳しかったからであった。結局、日本の芸能界に自浄能力を期待するのは、厳しいという感を私は強くしていた。

そうしたなか 2023 年 12 月 27 日、吉本興業の松本人志の性加害問題が『週刊文春』に報じられることになった。

6-1. 松本人志の不良文化を背景にした不条理な笑い

私が、松本人志を最初に見たのは、1982 年ごろ、関西のテレビのローカル番組であった。司会を島田紳助がやっていたことは記憶している。

その番組で漫才をしていたのだが、そのネタは、「あの陸上選手はカモシカのような足をしている」という言葉に対して「「カモシカのような足」というのは正確ではない。「カモシカの足のような足」というのが正確で「カモシカのような足」というのはここにカモシカの頭があって、カモシカの胴があってカモシカの足があるようなものを言うんだ」というようなネタであった。ちょっと気持ち悪い笑いが、さざ波のように客席に広がっていた。それまでのテンポの速い漫才と違ってあえてスローなテンポで不条理なネタをやっている松本らを見て「新しい笑い」を感じ取ってはいた。

1980 年代はじめごろ漫才ブームの時代と同時に「積み木崩し」に代表されるような校内暴力や不良文化の時代であった。

松本らが憧れ、目標にしていたのは、ツッパリ漫才を標榜した紳助竜介であった。

6−2. 横山やすしが、指摘したダウンタウンの笑いの特徴

1982 年、亡くなった横山やすしが司会を務めていた『ザ・テレビ演芸』（テレビ朝日系）に『ライト兄弟』という古い芸名で、松本人志と浜田雅功が出演した回があった。

そこで披瀝された演目は「家庭内暴力」を扱うもので、「子供」が「親なんかあまやかしといたらあかんで」と、子供の目線で親への暴力を肯定するボケを松本がかますという内容のものであった。

当時、中学生だった私はたまたま「ザ・テレビ演芸」を見ていたが、まだダウンタウンの笑いの特徴にはそれほど気が付いておらず、あまり深く考えずに笑っていたように思う。そんな中、横山やすし

の批評が今考えるとよく本質をいいあてるものであった。

漫才終了後、横山やすしは「あのな、漫才師なんやから、何喋ってもええねんけどな、笑いの中には『良質な笑い』と『悪質な笑い』がある。で、あんたら 2 人は悪質な笑いや」と全否定していた。

「それと、出てきてね、テレビで言うような漫才とちゃうねん」

「例えばやな、おとうさん、けなしたりとかな」

「自分らは新しいネタやっとると思うとるねんやろけど、こんなんは正味イモのネタや」

と、ケチョンケチョンにけなしていた。松本はこの時のことをベストセラー『遺書』のなかで振り返り「俺は何度も手がでそうになったが、我慢した。あの時殴っておけばよかった」と書いていた。思えば、この時点で横山やすしは、「弱者」をいじって笑いを取るダウンタウンのネタに苦言を呈していたわけだ。

しかし、私はこの時点ではまだ全面的な違和感をダウンタウンに感じていたわけではない。90 年代の『ごっつええかんじ』などはまだ面白いと思ってみていた。

7. 松本人志の笑いに違和感を感じ始める

私が、松本人志に本格的な違和感を感じ始めるのは、2010 年代に入ってからであった。

1980 年代はじめは不良文化が全面的に開花していた。それは体制側に反逆するもののように見えたが、その実、1968 年のようなラディカリズムではなく、体制側に簡単に取り込まれていくものであった。

2010 年代に入って、松本人志が、『ワイドナショー』で安倍政権の安保法制を肯定し、産経新聞で絶賛されたり、社会的強者の側の暴力を正当化する言説をテレビコメンテータとして次々述べ始めたころからその違和感はどんどん膨らんでいった。たとえば性加害を起こした事件を論評するとき必ず、加害者の側を擁護するコメントを出しているのを見て「この人は認識が歪んでいる」という感想を持ったものだ。

(同じくヤンキー文化としての不良文化を最初は前面に出しつつ、その後、急速に保守化していったものとして義家弘介ややしきたかんじんなどがいる。)

だが、松本人志の事件が私たちに教えているのは、単に個人的な問題でなく、その背後に吉本興業という巨大なエンタメ産業が存在しており、その吉本興業が、国家のクールジャパン政策を担当し、何百億という公金を支給されたり、在阪メディアのテレビ番組では吉本芸人は、ほとんど例外なく維新の応援団として出演するようになっている。その代表といえるのが、松本人志であり、万博のアンバサダーにダウンタウンが起用されているのは、象徴的なことであった。吉本興業の会長であった大崎洋は、ダウンタウンの育ての親だが、吉本興業の会長の座を退いたのは、万博事業の推進側に身をおいていたからであった。また安倍晋三は、首相として吉本新喜劇に出演したりもしていた。

吉本興業はいまやジャニーズや宝塚を超える国家権力(自民党や維新)と癒着した巨大権力に他ならない。

そのことを私が直接的に自覚するに至ったのは、北京でお笑い芸人、ぜんじろうのスタンダップコメディを聞いたことが大きい。ぜんじろうがモデルにしようとしたエンタツ・アチャコの漫才の仕掛人は、秋田実であった。

秋田実

https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009250355_00000

上方漫才の父といわれる秋田実は、1905 年に大阪で生まれた。本名は林広次という。

1923 年旧制大阪高校に入学したあと 1927 年に東京帝国大学文学部支那哲学科に入学した。

在学中は新人会に参加し、左翼活動を行ったという。1930 年から 31 年にかけては『戦旗』という雑誌の編集長をつとめた。1934 年に東京の住居を引き払い大阪に移り吉本興業に入社した。

1945 年 3 月には満洲映画協会演芸部の社員という肩書で勤務のために満州へ向かい満州在住の芸人で慰問団の一座を作り満州周辺を慰問もしている。

戦後は、「MZ 研進会」という漫才のサークル集団を 1949 年に旗揚げし、多くの漫才師を育てた。戦前の反戦思想から日本共産党の熱心な支持者だった。1960 年代から 70 年代にかけて秋田実を信奉するお笑い芸人は、革新陣営を支持していたという。

それから考えるとここ 20 年ほどの吉本興業の動きは、吉本興業という会社が、それとは正反対のものになっていることを示しているといえるだろう。

8. 北京でぜんじろうの社会風刺の笑いにはじめて接する

前述したようにぜんじろうのライブを北京で初めて見てからもう 7 年になる。

そこでぜんじろうからは、「吉本興業ではダウンタウンを北京政府（漢民族）とすると僕はウイグル自治区です」というギャグを聞いた。北京で聞いたのでリアリティは抜群であった。

吉本闇営業問題の時、吉本興業の社長、副社長ともにダウンタウンのマネージャーをやっていた人物であることから吉本興業が、ダウンタウンファーストの会社であることが明らかになった。

ぜんじろうから「みんなダウンタウンのまねをするので自分は逆いってやろうとおもったんです」という言葉を聞いたのもこの時であった。実際、吉本興業にいるお笑い芸人は、ダウンタウンに影響されているものが多い。

2023 年 12 月 17 日のスポーツアネックスの記事に以下のようなものが出ている。

「お笑いコンビ「千原兄弟」の千原ジュニア（49）が 17 日までに公式 YouTube チャンネルを更新。東京の吉本興業における、自身の“順列”について語る場面があった。

「東京の吉本でメディアを中心にやっている芸人。自分で言うことじゃないけど、俺 10 人ぐらいに入ってるわけよ」といい、上から「明石家さんま・ダウンタウン・今田耕司・130R・東野幸治・木村祐一・蛍原徹・千原兄弟」と名前を挙げる。

後輩から「え～～っ！」と驚きの声があがるなか、ジュニアは「でも、もしかしたらシベリア文太さんと、ぜんじろうさんがめっちゃキレてるかもしれんな」といい、笑わせていた。ここでいう千原兄弟の千原ジュニアは、松本人志の右腕といってよい存在だ。

最後にぜんじろうがダウンタウンのグループとは、別のくくりで出ていることからわかるようにダウンタウンの笑いとぜんじろうの笑いの方向性は全く逆であるといえる。

まず、ダウンタウンの松本人志は NSC という吉本興業のお笑い芸人養成学校の一期生であり、師匠について芸を磨くといったような経験はしていない。

第一期生ということから基本的には、松本人志は、後輩ばかりいる集団での長という役割を演じるようになり、笑いなども立場の弱い後輩を「いじる」ことによってとることが多くなっていった。完全に集団の長の役割を果たすようになった。

一方、ぜんじろうの目指す笑いは、権力者や強い者を風刺することによって生じる笑いである。市民の笑いとは基本的にこの権力者を風刺することから生まれる社会風刺の笑いである。社会的弱者を揶揄したり差別し、冷笑したりしないように、それだけは気を付けているとぜんじろうは、私などにも語っていた。

9. 上岡龍太郎唯一の弟子、ぜんじろう

2023 年 5 月 19 日、上岡龍太郎氏が、81 歳で亡くなった。

上岡氏は横山ノックらと漫画トリオを結成し、司会業など立て板に水の語りで評判の人であった。その上岡氏は 2000 年に自ら引退宣言し、芸能界から身を引いた。

ぜんじろうは、その上岡龍太郎氏の唯一の弟子であった。横山ノックらと漫画トリオを結成し、横山パンチという芸名で存在感を示した。

上岡氏は弟子のぜんじろうに「長いものにはまかれるな、しばしの栄光に酔おうではないか」という言葉を送っていたという。ぜんじろうはその言葉の書かれた紙を持ち歩き、私もその紙を北京で見せてもらったことがある。

伝統芸能にせよ、師弟には厳しさとしきたりがつきものである。あいさつ、かばん持ち、身のまわりの世話……しかし、上岡氏はそれらをおおいに嫌っていたという。

弟子のぜんじろうは『SmartFLASH』(2023.06.13)でこう証言する。

「師匠が部屋に入ってきたときに、僕が反射的に背筋のばしてあいさつしたら『軍隊やないねん

から、そうやって立ち上がるな！ 君は芸人なんやから、そこでおもしろいことを言いなさい』と言うんです。それで僕が懸命に、昨日あったことを一から十まで話そうとすると『あのな、しゃべりすぎ。そこまでしゃべれと誰が言うたんや』とさえぎられて、反省しきりでした。」

ここからは、縦社会の上下関係や軍隊的な秩序を嫌悪する上岡氏の指向性を見て取ることができるだろう。

評論家の佐高信氏は、笑いに強いこだわりをもつ人である。ビートたけしや島田紳助とは、相性が合わないが、上岡龍太郎や横山やすし―佐高信氏の対談集のなかに横山やすしとの対談が収録されているものがある―とは、相性は悪くなかったという。佐高氏は、『日刊ゲンダイ』「追悼譜」で上岡龍太郎を追悼している。

そこで上岡龍太郎の笑いは、桂米朝と共通する品の良さがあったと指摘している。

佐高氏は、『師弟』という本の取材で桂米朝とその弟子の桂枝雀にインタビューしたことがあるという。この本には上岡龍太郎-ぜんじろうの師弟を追加してもいいだろうと私は思う。

また、佐高氏は、上岡と対談したかったといい、飯沢匡(たすく)『武器としての笑い』(岩波新書 1977 年)の中の「儒教もユーモアのない道徳律であって、 孔子の伝記を読むと、斉の景公のところで喜劇役者を斬り殺している。笑いにとって孔子は大きな敵なのである。論語を読んでもユーモアはどこにもないところ、キリストの聖書とよく似ている」という言葉について語り合いたかったとも述べている。

最後に佐高氏は、上岡は、先述の『武器としての笑い』の言葉をわかっていたとし、「とすれば『週刊新潮』の 6 月 15 日号で百田尚樹などが追悼の弁を語っていい人物ではない。それは上岡への冒涜である」という言葉で締めくくっている。

Youtube に上岡龍太郎司会の EX テレビ大阪の動画が上がっていたので見てみた。

その参加メンバーが作家の小田実や野坂昭如、シンガーソングライターの高田渡、また立川談志などの豪華メンバーだった。そしてこういうメンバーにまじって初期のダウンタウンがでていたことがあるのだ。いまでは考えられないことだが、小田実とダウンタウンが同席していた時期があったのだ。

ヤングサンデーの山田玲司(れいじ)の youtube 動画で、松本人志を批判した中田敦彦と上岡龍太郎を比較し上岡龍太郎にあって中田敦彦にないものとして、「可愛げ」というものがあると指摘していた。

なるほど上岡氏は、テレビ番組で占い師を問い詰めて論破したりするが、冷笑はしなかった。同じ論破でもひろゆきの場合は、冷笑する。そこが上岡氏とひろゆきとの大きな違いであると思える。

上岡氏が、弟子のぜんじろうの社会風刺の笑いを応援していたのもそこと関係あるように思える。

10. 現代日本における笑いの多様性は担保されているか

ラリー遠田というお笑い評論家がいる。ラリー遠田は、中田敦彦が松本人志を批判した文脈で

「松本が笑いを独占しているわけではない。笑いの多様性は担保されている」という意味のことを述べていた。しかし、ぜんじろうが、やっているスタンダップコメディは、まだ日本では市民権を得ているとはいえない。なによりまずテレビからあらかじめ排除されている笑いである。そうである以上、日本で笑いの多様性が担保されているというのは、そうした現実を見ていない議論であろう。

11. れいわ新選組の応援演説で権力者を揶揄したぜんじろう

2022 年 6 月 4 日、ぜんじろうは、れいわ新撰組の応援演説としてスタンドアップコメディを披露していた。そのなかでワンライナージョークとして「安倍晋三と麻生太郎と森喜朗を乗せた飛行機が墜落しました。助かったのは誰でしょう」答え「日本国民」というジョークを披露して会場では大いに受けていた。

問題は、その後、7 月 8 日に安倍晋三が、山上徹也容疑者によって実際に銃撃を受け死亡したことによって発生した。

ぜんじろうの土曜日にやっているネット番組に大量のネトウヨが押し寄せ、「れいわ新選組の応援でいったワンライナージョークは不謹慎だ」「お前のジョークによって安倍晋三首相は、殺されたのだ」といった意味の大量の書き込みにあふれたのだ。

はじめての事態にぜんじろうも視聴者も驚いていた。そのなかで「ぜんじろうと松本人志では才能が違いすぎる」という書き込みをしていたネトウヨがいた。だがそう簡単に結論を出していいとは私は思わない。

現実世界でもよく名を知られた人間も同様の書き込みをしていた。

実業家、タレントの堀江貴文は「反省すべきは、ネット上に無数にいたアベガー達だよな。そいつらに犯人は洗脳されていたようなものだ」と投稿した。

また、評論家の八幡和郎は、池田信夫が、運営するサイト『アゴラ』に、「安倍狙撃事件の犯人は、反アベ無罪を煽った空気だ」という記事を寄稿していた。

さらにフジテレビ解説委員の平井文夫は、「私たちが苦しんでいるのは、日本という国が、この社会の空気が、安倍さんを殺してしまったのではないかということなのだ」と述べた。

一見、もっともらしく聞こえるが、これらは根拠のない妄想である。

実際は、犯人の山上は、冷笑系ネトウヨであった。

山上の銃撃は、「民主主義への挑戦」でも「暴力による言論の封殺」を目的にしたものでもなく安倍晋三への私怨によるものであった。

むしろ民主主義を破壊していたのは、安倍政権のほうだったいうべきだろう。

もし、権力者を批判したり揶揄したりすることでテロが発生するというのなら、日本では毎日テロが発生していなければおかしいということになる。権力者を笑いで揶揄することは市民の権利であるといってよいものである。

おわりに

私は、以前に「ダウンタウン、松本人志とぜんじろうを比較して、松本人志は毎日テレビに出ているが、ぜんじろうはテレビには出ていない。しかしまだ完全に決着がついたとは言えない」と書いたことがある。

だが、性加害問題で松本人志氏が引退する可能性が出て来た今、こう書いたことはそう間違ってはいなかったと思っている。たとえ巨大権力をもっている芸能事務所であってもスポンサーが離れればどうしようもないという時代にはいっている。吉本興業は、「後輩いじりの笑い」は終わりにすべき時が来ており、むしろ社会的強者を揶揄する笑いに転じていくべきだろう。松本人志性加害問題とは、松本人志というタレント個人の問題ではなく、自民党政府や維新などと癒着しすぎた吉本興業という会社組織の問題でもある。私はその変化を示すお笑い芸人としてぜんじろうに期待したいと思う。

市民科学者は、フーコ的な「知と権力」への考察のみならず「笑いと権力」という問題を考察する必要がある。

最後に上田昌文氏が、市民科学研究室の講座「日本の市民科学者の系譜」の中で、市民科学者の高木仁三郎氏が独特のユーモアの持ち主だったことを証言していたことを思い出しつつ、「市民科学にももっと社会風刺の笑いを！」と私はいいたい。

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文を興味深いと感じていただけるのであれば、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100 円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる―そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

ワンコインカンパ　←ここをクリック（市民研の支払いサイトに繋がります）